

秋田の人人



⑤

和崎ハル

武埜三山

和崎さんは、再び志を立てて上京し、

お茶の水の美容学校に入学して、美顔術を習得して帰国し、秋田市で一番早く美容術をひろめた。和崎美容院に行けば、美顔の術を施してくれて、美人になれるというので大変繁昌した。日本髪のみ見馴れていたものの眼には、あれは耳かくしと云うものだ。耳までかくれるような髪のかき方は、女のくびが短く見えて見詰ともない。と云うものもあったが、流行には抗すべくもなかった。単に美顔術を施して貰いたいというものばかりでなく、弟子入りして追々美容院を開きたいと申入れて通うものもあった。その中には身の上話をはじめ、和崎さんはその相談役であり、解答者でもあった。お嫁の欲しいものは、和崎美容院に行けば、どんなお嫁もえらべるというので、ずいぶんたのまれ、世話もした。

秋田魁新報社が、身の上相談欄を設けその解答者に和崎さんが頼まれた。新聞紙上の解答のみでは満足できないとして満足の行くまで一問一答したい。と和崎さんの私宅に行くものが多かった。美容師が本職か、身の上相談が本職かわからないほど、和崎私宅が賑わった。

大正十三年六月秋田市に全国にもめずらしい芸者学校(のぞみの会)が生まれた。生徒は六十名に及んだ。秋田美人は必ずしも秋田市川反の芸者によって代表

生まれの騎兵将校和崎豊之氏と結婚した。そして二人のうち一方が先に死んだときは、必ずこれに殉ずる。と堅く約束したほどの夫婦仲であった。結婚十五年間に男子二人、女子三人の親となったが夫は病の床に臥し、日々衰え、再起の見込みはなかった。結婚当時の約束のことを思い浮べ「あなたに万一のことがあったら、あの時の約束通り、わたしも自殺してお伴することはわけないが、老いの母と五人の子供をどうしてよいか、これを考えると、わたしはお伴ができない。あなたのお考えは如何ですか」ときいた

が夫は目に涙を一ぱい浮べて、淋しそうに一言も答えなかった。重ねてわたしは六人のいのちを引受けなければならぬから残ります。と云ったら、夫は無言のままうなづいて、間もなく瞑目した。

× ×

斯うして残された五人の子供と、老い

和崎ハル氏は、明治十八年二月一日秋田市楡山栗谷信幸氏の三女に生まれ、秋田高等女学校第一期卒業生である。音楽教師を志し、女子音楽学校に入学したが、在学三年のとき、風邪(かぜ)でほとんどをいため中退した。

和崎さんは十五才のとき「われ女子ならば更に希望なし、男子なれば水兵となってお国のためにつくしたい」という作文をかいた。家庭に籠り勝ちの女子に生まれたことを情けなく思い、水兵は世界を見る機会に恵まれていたことが少女時代の和崎さんには羨ましかったのである。明治四十年二十二才のとき、金沢市

× ×

の姑をわずかばかりの恩給で、親るい縁者も知人もない他郷での生活は見込みはなかつたので、大正十一年四月生まれ故郷の秋田に帰った。伊藤永之介氏夫人輝子さんは、母は貧乏と云っても、多少なりとも恩給はあるし、生家の援助もあったが、永之介が生活に窮したところの貧乏とは違う。と当時を思い浮べて語っているが、生家の援助にも限度があり、いつまでも世話にはなっていられないと心に深く決するところがあつた。

× ×

青江舜二郎氏の生家大島衛生堂は、茶町に秋田市第一の薬店を開いていたところ和崎さんも近くに住んでいて、時々すりを買ひに見えた。青江氏の母堂は偶にはくれてやることもあつた。必ず服用の結果を報告にくるので、真面目な方であると感じ将来人の信用を得る人となるであらう。と青江氏の母堂は語っていた。

× ×